



桜蓮祭を終えて

第7回桜蓮祭実行委員会 源 明 麻里那

木々の色もより一層深みが増し、身にしみる寒さが秋の暮れを知らせる季節になった11月8日に、第7回桜蓮祭を無事開催することができたことを大変うれしく思います。今年度は、「想乗幸花～想いを乗せて幸せの花を咲かす」というスローガンをかけ、「地域の方々との交流」や「世代を問わず楽しむことができる桜蓮祭の開催」を目標に準備を始めました。昨年の桜蓮祭、そして立派に運営しきった実行委員の先輩方を見て、今年は自分たちが中心となると考えると、不安で仕方がなかったのを今でも覚えています。

今年度の桜蓮祭当日は、冷え込むといった予報が出され心配していましたが、たくさんの方のご来場により、学内がほかほかとした雰囲気包まれていたように思います。また、学内にはたくさんの笑顔が見え、大変うれしく思いました。きっとこの大学の良さもたくさんの方に知っていただけたのではないかと思います。これも、開催にあたり、多くの方のご協力があったからだ感謝の気持ちでいっぱいです。

私たちは、準備を進める際に、どのようにして多くの方に大学に足を運んでいただくか、どうすれば私たちの大学の良さを知っていただけるかを考え、話し合いをしてきました。あれもしたい、これもしたいとたくさんのアイデアが浮かぶものの、私たちの考慮が足りなかったために、たくさんの方に迷惑をかけてしまいました。しかし、先生方を含め大学関係者の方、先輩方、1、2年生の皆さんに温かく見守っていただき、また協力していただいたからこそ、桜蓮祭当日を成功という形で終えることができたのだと思っています。

本当にありがとうございました。

最後になりましたが、今年度経験し感じたことを次年度の実行委員に引き継ぎ、次年度の桜蓮祭がさらなる盛り上がりをもたせることを期待しています。

も く じ

- 1 桜蓮祭を終えて
- 2 学生の活動

・ベトナム滞在記
・ベトナム カンボジア旅行記



- 3 看護実習
- 4 授業風景



- 5 オープンキャンパス・
継続式

新潟県立看護大学継続式



- 6 研究報告
科学研究費採択課題一覧
- 7 サークル紹介 (茶道)



卒業生は今

- 8 どこでもカレッジプロジェクト

ベトナム滞在記

2年 中田仁美 皆川さゆり 横田侑子 山田葉子

私たちは8月7日から11日までベトナムのクイニョンという都市に行ってきました。ベトナム最大の都市であるホーチミンから飛行機で2時間くらいのところにあります。

渡辺先生のハンセン病研究の手伝いということで2日間病院へ行き、看護師長さんから患者さんの話を聞きました。先生が患者さん一人一人に住んでいる場所、発症した年齢、学歴、家族構成などをインタビューしました。これは貧困や家族歴とハンセン病の関係などを知るためです。私たちはその内容を記録としてビデオに撮っていました。

患者さんは全体的に年齢層が高く、発見

が遅れる人が多いため症状が重い人が多かったです。中には手足の変形や薬の副作用により皮膚が黒ずんでいる人もいました。また、ベトナムは多民族国家なので、患者さんの中には少数民族の人もいて言葉が通じず、その言葉が分かる患者さんに通訳してもらうこともありました。

病院の様子は緑が多く、海が近くとても開放的な様子でした。病院の敷地内に居住施設もありとても広く、施設内の人たちは自転車やバイクで移動していました。病室を出ると窓も壁もなく、すぐ外に面していて風の通りがとても良かったのが印象的でした。

患者さんたちの日常生活は自立していて、

病状も比較的安定していたので近くの海に遊びに行ったり、外で談話したり自由に行動していました。

最終日には、日本とベトナムの医療の違いについて病院の看護師さんと交流会を行いました。私たちが病院内を見学して感じたこと伝えたり、日本の医療に対する質問を受けたりしました。お互いにより刺激を受けました。

ベトナムは料理もおいしく、人もやさしく、時間もゆっくりと流れ有意義な時間をすごすことができました。ぜひ皆さんも興味がある方はベトナムへ行ってください。楽しさは私たちが保証します!!
Cám ơn. (ありがとう)



ベトナム・カンボジア旅行記

3年 古川 美 冴

この夏、カンボジアとベトナムを旅し、現地の医療・福祉とその環境について学ぶことができた。

カンボジア—父と楽しそうに病院給食を食べるHIV感染者。障害をもつ我が子を抱えて、頬に何度も何度もキスをする母親。片や座り込み他人の同情を乞う母親。わずかな水欲しさに外国人の腕をつかむ幼児。物乞いをする幼い兄妹や腰の曲がった老女。街中の交差点で大麻を吸い昇天する男性。ゴミを食べる住民…。ここで生きるとはどういうことかを考えさせられる。



日本のNGO団体が設立した国立小児病院外科病棟がプノンペンにある。日本人スタッフを募る患児や家族が多い。現在、カンボジアの医療は外国からの支援によりほとんどが運営されている。

アンコールワット遺跡群の繊細で美しく壮大な創りと、長い時を刻み、そこに在り続けた佇まいからは、歴史の重さ、世界の大きさ、人間の小ささを思い知る。

「クルサー・リッリエイ〜幸せの家〜」という名の孤児院では、人懐っこい彼らに負けまいと夢中になって遊ぶ。年長者が年少者を養護する場面も見られる。どうかこの瞳がいつまでも輝いていますように、そう願わずにはいられない。

今回の旅で感じたのは、自分が無力であるというこ



と。何も見ず、触れず、知らず、夢や理想を語る自分が情けなくなる。この経験を今後どう活かすかを課題とし、果たすべき務めを全うしたい。小さいなりに、無力なりに、今できることを精一杯に。



古川さん あちうでお世話になった先生 佐藤さん

ベトナム・カンボジア旅行記

3年 佐藤 愛 佳

自分の知らない場所へ行く——未知の空間には、新しい刺激がたくさん落ちている。「みっちゃん、カンボジア行きたいん

だけだ。」「いいねえ。いつ行く?」
成り行きはこんな感じ。素直に見たかったんだ。国を、文化を、人々を。「発展途上」

と称される国の現状を、自分の目で。そうやって、ただ漠然とした「何かしたい」の手がかり探しに出かけた。

ベトナム・カンボジアの2カ国4都市を10日に渡り旅して、病院や孤児院などの

施設をいくつか訪れたり、安宿に泊まって
ぼたっくられたり、アンコールワットに昇
る朝日に感動したりして、自らの五感で様々
なことを感じた。

「何かしたい」じゃ足りなくて、悔し涙
が流れた。人々の優しさに触れ、心があた
たかくなった。子どもたちが向けてくれた
屈託のない絵顔を見て、やっぱり「何かし
たい」と思った。

この旅で、本当に様々な人たちと知り合

って、つながることができた。人が人を
つないでいって偶然が重なり合い実現した
こと。それでいてなお、こうなることは必
然だったんだろうな。そうやって世界はつ
ながっていくんだろう。私もつながりのひ
とつになろう。そうすることで、つないで
くれた人たちへの感謝を示していこう。そ
れが、今の私の義務であると強く感じてい
る。

こんな短い文章じゃ、まとめきれない！



「思い出」だけじゃ収まらない！そんな10
日間だった。

まだまだ見てないものはたくさんある。
だから、旅はやめられないんだ。

ふれあい実習

今年のふれあい実習

生物・医学領域 関谷 伸一

平成20年度の「ふれあい実習」は1年
生93名が参加して、10月14日から16日
の2泊3日で上越市大島区、浦川原区、牧区、
安塚区で行われました。

実習初日には「地域探索入門」を今年度
初めて試みました。このプログラムでは、

学生たちが大島区田麦地内を歩いて探索し、
山林や田畑を観察したり、地域の方々に聞
き取り調査を実施したりして、地域の自然
と生活を理解し、またコミュニケーション
の大切さを学びました。その他、林業体験、
食体験、民泊先での農業体験などを通して、



看護の対象である「生活者」に対する学び
を深めました。

ふれあい実習で学んだこと

1年 佐藤 裕佳

私たちは10月14日から16日の3日間
ふれあい実習に行きました。様々な体験
の中で私が印象に残っていることは、地
域の方の講和と民泊です。私は安塚区に



行きました。
講和では地
域の特性に
ついて多く
聞くことが
できました。
1日目に泊
まった六夜
山荘では集
落の人々が

協力し合って運営していること、雪室を
利用して農産物の貯蔵をしたり冷房に使
用したりしていること、太陽光を照明に
利用している中学校があること、また小
学校を改造して高齢者の活動促進施設と
して利用していることなど、安塚区では
地域を活性化するために様々な活動をし
ていることがわかりました。民泊では地
域のつながりを感じることができました。
隣近所との交流が多く行われていて、お
年寄りの方のこともみんな考えている
ことがわかりました。病院が遠いこと
について私は大変だと思っていたのですが、
病院やデイサービスが車で送迎してくれ

ているので、そこまで大変だと感じたこ
とはないということでした。このことから、
日常を支えるネットワークができていて、
遠くに住んでいてもしっかりとつなが
りがあると感じました。

今回のふれあい実習では様々な体験を、
グループに関係なく皆で協力しながらす
ることができて貴重な体験となりました。
皆で協力したことによってよりよい経験
ができたと思います。また、看護の対象
は様々な地域の人々であるので、その人々
の生活や考え方、地域の連携などを考慮
しなければならぬと感じました。そし
てその人たち一人一人をみていくことが
大切だと思いました。なので、この実習
で学んだことを忘れずに、これから先に
活かしていけたらよいと考えています。

看護学実習

基礎看護実習を終えて

2年 西澤 由美

基礎看護実習では、たくさんのことを
体験し、見学することができました。病
棟実習に行く前は、不安と緊張でしたが、
実習先の方々は優しく丁寧に教えてくだ
さいました。私は実習を通して、学んだ
ことが二つあります。一つ目は患者さん
と信頼関係を築くことはとても難しいこ
とだと学びました。会っていきなり、病
気のことを聞いて答えてくれるとは限り
ません。コミュニケーションを重ねて、
信頼を得ることができたら、本当の気持
ちや病気についてなど話してくれるよう
になると分かりました。信頼関係を築く
ための第一歩は、言葉遣いや身だしなみ
など第一印象からきちんとしていくこと

が大切だと思いました。私は、今回の実
習で受け持ち患者さんと十分な信頼関係
を築くことができなかったと思います。
コミュニケーション不足と患者さんの気
持ちを理解する姿勢が足りませんでした。
この反省を忘れないで、日常生活からま
ず実践していきたいです。まずは、友達
や先生と信頼関係が築けなかったら、患
者さんとも築けるはずがないと思います。

二つ目は看護には広い視野を持ち、患
者さんの立場になって物事を考えること
が大切だと感じました。患者さんと話を
しようと思っても、患者さんは休みたか
ったり、疲れているかもしれません。患
者さんの状態を見て、時に距離を置くこ

とも大切なことだとわかりました。

初めての实習で戸惑ったり、悩んだり
したけれど、先生や実習班の仲間と助け
合って無事に終了してよかったです。こ
れからの学習では、知識と技術を十分に
身につけ、来年の領域別実習に生かして
いきたいです。



▲ 西澤さん

5月の中旬から4週間私の地元、長岡市の越路保健センターと長岡保健所で地域看護学実習をさせて頂きました。普段は一人暮らしをしていますが、地域看護学実習だけは実家から実習先に通うことができ、母が毎日お弁当を作って持たせてくれることが嬉しかった思い出の一つです。

地域看護学実習は地域診断実習、保健所・市町村実習、訪問看護実習で構成されています。中でも保健所・市町村実習で実施した健康教育は大変多くのことを学ぶことができました。

私達のグループは、「生活習慣を見直して元気な毎日を過ごそう!!」というテーマで生活習慣を見直すことを目的に健康教育を実施しました。健康問題の把握から始まり、内容やシナリオ、教材の作成までグループメンバーと協力しながら進めていきました。指導者さんを含めた前日のリハーサルでは考えていた企画の通りに展開できず、健康教育の難しさ

を実感しました。多くの指導と助言を頂き、当日は私達らしさを十分発揮した健康教育を行うことができたと思います。参加者の方々とやり取りをしながら進めていくことで、参加者の背景に家族や地域があることを学ぶことができました。参加者に合わせた内容をいかにわかりやすく伝えるか、どのような雰囲気の中で進めるか、多くのことを考えることができました。また、参加者の方々から健康教育中に様々な質問を受けました。私たちは参加者の質問に答えようと必死に参考書などで調べましたが、対象者の状態や地域の生活を知らないまま、一般的な返答や曖昧な返答をするこ

とは間違った情報を伝えることになることを学びました。自分たちの限界を知り、謙虚な姿勢で臨むことが大切であり、答えることができなかったものを、その後どのように伝えていけばよいのか考えることが私達の課題となりました。

今後、地域に限らず医療施設など様々な場面で指導や教育をしていく機会があると思います。今回健康教育で学んだことを生かして取り組みたいと思います。



▲ 井開未希子

授業風景

基礎ゼミナール 7

1年 山岸 明大

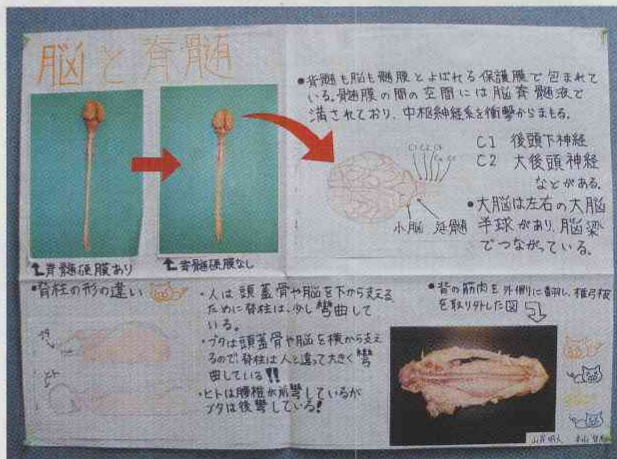
基礎ゼミナール7は男子5人、女子5人、関谷先生を含め11人で、ブタ胎児標本の解剖を行いました。最初の授業で、ブタはヒトと同じ哺乳類であり、ヒトの身体の構造とよく似ており、体毛が少なく、手ごろの大きさで解剖に適した体をしていることを教わりました。解剖に入る前に、ホルマリンに浸けてあるブタ胎児を洗い、計測することから始まりましたが、今まで経験したことが無く違和感がありました。

そして、二人一組のグループに分かれ、胸部、腹部、脊髄・脳などの部位を担当し解剖を始めました。解剖のマニュアルを読んでも初めて聞く筋肉・神経などがあり、最初はなかなか解剖を進めていくことができませんでした。わからない筋肉・神経などがあり先生に聞くと、先生はただ答えてくれるだけでなく、資料を持ってきて教えてくれたり、ヒトの場合だとこうなっているなどを説明してくれたりして、最初のころとは違い、興味を持って多くのことを学ぶことができました。私のグループでは、脊髄と脳の解剖をしました。背中の筋肉（固有背筋）を開き脊柱を出し、脊髄と脳を取り出すには多くの時間を要し、また先生の助けを借りてようやく出来ました。解剖をしていく上で一番苦労したことは、筋肉・神経などの名前と実際の身体の部位を一致さ

せて確認していくことでした。

また私たちのゼミでは、11月に行われた桜連祭に解剖の展示をしました。展示に際しては、解剖の手順を書き、イラスト、写真などを使ってヒトとブタの比較をして、わかりやすくなるように工夫しました。私たちが実際に使ったメス、ハサミ、ピンセットそしてまだ解剖していないブタ胎児1頭も一緒に展示したところ、たくさんの人た

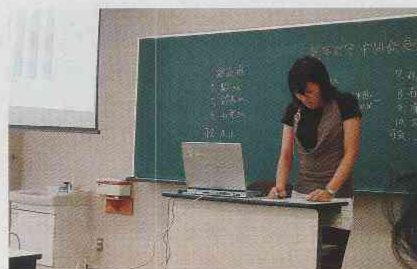
ちが興味深そうに見てくれました。この基礎ゼミナールを選んで貴重な体験ができてよかったと思います。



自分一人ではない論文作成

4年 清水 聡美

「論文のテーマ何にするか決まった?」
『全然決まってない。』論文のテーマを決め、研究にとりかかるまでこんな会話が友人と繰り返されていました。私の場合、テーマがあいまいで自分が何を研究して取り組んでいきたいのかわからずさまよっている状態でした。そんな中で、老年ゼミは論文作成を個別に進めていく



のではなく、ゼミ仲間全体での集まりを繰り返し行ってきました。全体ゼミのおかげで自分では視野が狭くなっていた点をゼミ仲間指摘されて気づかされたり、大勢の人の前で自分のやりたいことを伝えることの大変さ、誰が見てもわかるような資料作りや情報の提示による論文作成をすることの難しさを学ぶことができました。いろんな人の意見を聞き入れ、アドバイスをもらいながら修正を繰り返して論文を作成していくことは、大変だったけどみんなも大変なんだ、がんばっ

ているんだと思えばやる気も出て一生懸命取り組んでいくことができました。



大学院

4月に本学修士課程3期生の8名が入学しました。大学院では、看護学と看護ケアの質の向上のために、より専門的な学びが展開されています。大学院生は学生が仕事をしながら就学が可能のように、休日や夜間に講義が行われることがあります。取材日は日曜日でしたが、老年看護援助展開論と認知症看護論が終日行わ

れていました。また、大学院での講義では、教員が一方向的に知識を伝達する講義形態だけではなく、学生が個々に問題提起をし、それに対するディスカッションを通して課題を深めていきます。この日は、受講している学生が、それぞれの臨床経験などから老年看護実践の場の現状分析と課題の抽出を進めていきました。



オープンキャンパス

8月1日、5日にオープンキャンパスが行われ、参加者は両日で217名にのびりました。在学生もボランティアで体験学習や学生相談に応じました。

参加者からは「とても楽しく参加することができた」「先輩たちが大変明るく優しい方たちで楽しかった」という意見がありました。

参加者数

開催日	参加者数（県内者数）
8月1日（金）	70（44）
8月5日（火）	147（65）



継 燈 式

7月4日、はじめての病棟実習である基礎看護学実習を前にした2年生が、先輩から看護の燈を受け継ぐことで、臨床

実習への決意を新たにしました。何もかもが初体験となる実習を前に、緊張が強かった様子ですが、実習病院の看護部長

の方々からの「病棟スタッフが皆さんを待っています。」という言葉に励まされたに違いありません。



アルコール・薬物乱用防止教育とエイズ・性教育の統合についての基礎的研究

人間環境科学領域 社会科学 徐 淑子

現在、文科省の科学研究費補助金を受け、教育活動のかたわら、標題の研究に取り組んでおります。「アルコール・薬物乱用」と「エイズ・性感染症」は、健康教育実践の中では多くの場合、おのおの独立した健康課題として別個に扱われます。しかし、アルコールや薬物の作用が個人の判断力や現実吟味の能力に影響し、その結果、安全でない性行動をとってしまう可能性を増やすことが、さまざまな調査研究によって明らかになっています。このことを踏まえ、基本的な知識を身につけたあとの、一歩踏み込んだ段階の予防教育として、あるいは、健康を「自己形成」「生き方」の問題と関連づけてとらえるライフスキル教育とし、このふたつの健康問題を同時にとりあつかえないものか、と考案研究課題を立案しました。

さて、このようなアプローチは、日本や他の国で前例がないわけではありません。

ですから、とりあえずは日本にいて手に入る情報の収集と整理を行うことから始めました。しかし、着手後すぐに、私が当初考えていた以上、視野を広く定めないとまぐいかな研究であるとわかりました。たとえば、日本ではアルコール依存症の予備軍ともなりうる「多量飲酒者」が200万人以上いると見積もられています。しかし、この規模に見合った保健・医療・福祉資源は慢性的に不足しており、予防・介入・ケア・地域生活と流れるシステムフローもうまくつながっていないことがわかりました。私の研究でやろうとしていることは、いわゆる一次予防ですが、一次予防が真の意味で効果を発揮するのは、二次予防や三次予防、つまり健康問題が起こったあとに病気の影響を最小限にとどめるための手当てとのバランスの中です。一介の研究者でしかない私ができること

は非常に小さいのですが、保健・医療・福祉の領域で依存症ケアに携わる多種多様の専門職者からの教唆を受けながら、短期に・長期に目標を立てて、研究を進めていきたいと考えております。



急性期治療を受ける高齢患者の睡眠の変化とせん妄発症のプロセスの絡みについての研究

老年看護学 菅原 峰子



「せん妄」という言葉は、一般によく耳にする言葉ではないかと思えます。これは入院、療養生活中の高齢者の方に多くみられる精神症状のひとつで、夜間などに急に自分が入院していることがわからなくなり、治療のための点滴や管などを抜こうとしたり、「家に帰る」と大声を出すようなことがあります。これは一例ですが、時間や場所や人物という見当識に障害が出たり、記憶や集中力が落ちることが急激に起こることが「せん妄」と

定義されています。点滴を抜いてしまう、安静にしていられないということは、病気の治療が進まないために医療者の困難感も大きいのですが、何より高齢患者さんご本人やご家族が辛い思いをされます。

せん妄は、身体状況の悪化や精神的なストレスなど複数の要因が複雑に影響しあって起こることがわかってきています。そのため、看護者は高齢患者さんの様々なことに気を配って観察し、せん妄のきっかけとなるような事を取り除いていか

平成20年度 科学研究費採択課題一覧

1 新規採択課題

研究代表者	課 題 (期 間)	研究種目
渡辺 弘之	ベトナムのハンセン病(元)患者および家族の状況分析と社会復帰支援に関する研究(2008～2011年度)	基盤研究
朝倉 京子	看護師の業務権限の見直しに向けた論理的・帰納的研究:自律性再考(2008～2011年度)	基盤研究
酒井 禎子	緩和ケアに移行するがん患者・家族の意思決定支援モデル構築(2008～2010年度)	基盤研究
飯吉 令枝	豪雪過疎地域の高齢者の自立生活継続のための介護予防マネジメント技術の検討(2008～2010年度)	基盤研究
水澤 久恵	認知症高齢者の意思決定の構造と意思決定支援ガイドモデルの作成に関する研究(2008～2010年度)	萌芽研究
西片 真弓	母体搬送となった女性の搬送前後のストレス要因と看護ケアの取り組みについての検討(2008～2010年度)	若手研究
若杉 歩	掻破行為のみられる寝たきり高齢者の皮膚状態の類型化と対応の実態(2008～2009年度)	若手研究
櫻井 信人	自死遺族を対象とした自助グループの構築に関する研究(2008～2010年度)	若手研究
長瀬 亜岐	高齢者救急に対応する介護職の教育プログラムの開発(2008～2010年度)	若手研究
飯田 智恵	豪雪地域における前期高齢者の日常生活活動の実態(2008～2010年度)	若手研究

2 継続課題

研究代表者	課 題 (期 間)	研究種目
小林 恵子	子ども虐待事例に対する保健師のケアの検証と評価に関する研究(2006～2008年度)	基盤研究
徐 淑子	アルコール・薬物乱用防止教育とエイズ教育統合の試み(2007～2008年度)	基盤研究
加城真美子	0歳から12歳までの足の発育に関する基礎的研究(2007～2009年度)	基盤研究
平澤 則子	難病患者家族の介護プロセスにおける対処方略の学習支援プログラム開発(2007～2009年度)	基盤研究
栗生田友子	高次脳機能障害患者の症状に対する家族の認知と理解を促進するための介入研究(2006～2008年度)	萌芽研究
岡村 典子	中堅看護師のエモーショナル・インテリジェンス能力育成と組織の活性化に関する研究(2007～2008年度)	若手研究
菅原 峰子	急性期治療を受ける高齢患者の睡眠の変化とせん妄発症のプロセスの絡みについての研究(2007～2009年度)	若手研究

なければなりません。せん妄の予防になるといわれる看護ケアはいくつかありますが、そのひとつに正常な睡眠と覚醒のパターンを維持していくことが含まれています。加齢とともに睡眠の深さは浅くなり、不眠を呈しやすくなります。さらに病院に入院すると、そこはこれまで過ごしてきた環境と大きく異なり、一晩中、

医療機器の作動音がしているかもしれません。また、疾患からくる症状は、眠りを妨げるかもしれません。入院後に変化を生じる高齢患者さんの睡眠の変化とせん妄症状をよく調べることで、せん妄を予防するような看護ケアの開発に役に立てたいと思っています。

私は、看護師として看護実践をしていた

間にこのような高齢患者さんにたくさん出会い、その時の経験が今の研究テーマにつながっています。高齢者の方が、病気で入院が必要になっても、早く、順調に回復できるようにするために看護ができることは何なのかを考えています。

サークル紹介

茶道

茶道サークル長 3年 本間 絵理 香

皆さん、こんにちは。皆さんは「茶道」と聞いてどういうイメージを持つでしょうか？色々な作法や専門用語があって難しそうだというイメージが強いかもしれませんが、確かに、作法や言葉など覚えることはたくさんあります。しかし、茶道とはとても奥深いものですが、そんなに難しく考える必要はありません。人にお茶を美味しく飲んでほしい、くつろいでほしいというような「おもてなしの心」が一番大切です。最初は難しいかもしれませんが、その作法を覚えて出来るようになるうちに、茶道についてどんどん知りたくなっていくと思います。また、お茶を点てることによって、心を落ち着かせ、自分を見つめることのできる時間を作ることができます。私自身も、茶道を始めて思いやりの気持ちを学びましたし、これからたくさん学んでいきたいと思っています。

茶道サークルは先輩方が2005年4月に立ち上げ、今年で4年目になります。お茶を通して、看護する上で欠かすことの

できない思いやりの心を学んでいこうという思いで活動しています。今年度は新たに一年生7名の部員が加わって現在30名という大所帯となり、活動の幅も広くなりとても嬉しく思っています。

活動内容としては外部から茶道の先生をお招きし、週一回お稽古をし、学園祭などでお点前を披露しています。また、随時開かれているお茶会に足を運んでいます。さらに、去年から大きなお茶会に看護大学として参加させて頂いています。今年度は7月20日に高田小町で行われた「青年部共催 第23回学生・生徒交流茶会」に参加させて頂きました。お茶を点てたり、亭主として話したりとても緊張しましたが、部員全員で協力し合い、一人ひとりたくさん練習した甲斐があり、評判も良く成功という形で終わることができました。このように様々な活動をしなが、その中で一人ひとりのお点前により磨き



をかけています。

このサークルは、この大学に入って初めて茶道を始めた部員がほとんどです。茶道の先生や先輩方に作法を代々教えていただきながらの活動となっています。そんなに難しく考えず、少しでも興味がある人は茶道サークルに来てみてください。始めることで、だんだん茶道の魅力にはまっていくと思いますよ。茶道は奥深く、卒業してからも一生続けられるものだと思います。皆さんもぜひ茶道を始めてみてはいかがでしょうか？

卒業生は今

近況報告

1期生 亀尾 美佳

私は岐阜大学医学部付属病院に就職しました。整形外科・神経内科・老年科、総合診療部の混合病棟に所属しています。手術、内科的治療、精査などが行われ、忙しい日々です。

振り返ると、仕事を覚えることと人と会話することに精一杯の新人看護師、少し余裕ができた2年目を経て、3年目。最近は看護の楽しさを感じていますが、キャリアを積み重ねるに見合った能力も要求されます。新人の時には先輩に教えを請うこともできましたが、今はそうはいきません。専門職として常に新しい知識、技術を吸収していかなければならない責任があると感じています。しかしそれ以上に、自分の理想の看護を掲げて、自信を持って看護したい、との思いから文献を手にとっています。私の勤める病院では研修も多く開催されているため有効に活用しています。また、リーダーナース

としての自覚と行動を身につけるべく努力しています。できる最大限の看護を提供しよう、と、つい担当に入れ込んでしまう私ですが、必要とされる時に必要とされる看護を提供するため、病棟全体を把握し、管理することを学んでいます。

怠け者の私は仕事に行くのが億劫なこともあります。しかし、人に期待され、笑顔向けられれば励まされます。小さな進歩一つでも、それに携わった自分の喜びや達成感として感じています。また、同僚とバレーボールで汗を流したり、キャンプに行ったり、年に数回は大学の頃からの友人と旅行に行ったりして、気力・体力

を充実させています。

3年目も終盤に差し掛かりますが、日々の喜び・楽しみを糧に奮闘していきます。次の階段を登る時、3年目はどうだったか、理想の看護師に近づけたか、振り返るのが楽しみです。



亀尾さん(後方右)と職場の皆様

どこでも カレッジ プロジェクト

看護師の再就労を支援します。

文部科学省「社会人の学びなおしニーズ対応教育推進プログラム」

看護技術・最新の医療や制度の知識に不安のある方、
産後・長期休暇をとって復帰する方等、
「学びなおし」ニーズをお持ちのあなたを
応援します。

多彩なプログラム

- 看護大学での講義の受講
- インターネットを通じての自宅学習
- 多彩な技術演習
- 臨床実習……etc.

講義や演習、実習を通しての知識や技術を再確認することができます。
また、個別に内容を選択できるので、様々な学び方が可能です。
その他、大学の教員が相談に応じますし、図書館も活用できます。

規定の内容を修了することで、修了証を発行します。

随時
受付中

参加要件 看護師の免許を取得していること

募集人員 若干名

応募が多数の場合は、現在就労しておらず、将来看護師としての勤務希望者を優先しますが、その他の方もできるだけご希望に沿えるようにいたしますので、ご連絡ください。

意欲ある看護職のための「再挑戦」の機会拡大は、他人事ではなく、あまねく看護の世界で、特に教育に携わる看護大学において、特筆されるべき課題と考えています。
「再挑戦」への自信は多彩な自己学習の繰り返しの中から生まれると私達は考えており、この度、文部科学省の委

託で取組を始めたプロジェクト「看護師の学び直しを支援する地域指向型オープン／バーチャル・カレッジの試み」がこの課題の解決に役立つことを心から願ってやみません。

新潟県立看護大学 看護研究交流センター
センター長 吉山 直樹

編集後記

大学の活気は夏から秋にかけてピークに達するようにみえます。実習や大学祭など大学生活でエネルギーを費やす行事が目白押しです。少し前のことですが、私自身の学生生活を振り返ると、実習の緊張と自己の客観視、知識の統合はつらい作業の連続ですが、その傍らにある仲間との交流は大学生活でしか味わえないものだったように思います。

今号では海外にまで学びを深めに出かけた学生の活動も紹介しました。報告に載せきれなかった体験も数多くあったと思いますが、将来の大切な糧となるでしょう。

広報委員 菅原 峰子



新潟県立看護大学
Niigata College of Nursing

〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地
Tel 025-526-2811
Fax 025-526-2815
E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp

<http://www.niigata-cn.ac.jp>

発行日：2008年12月17日



古紙配合率70%、
白色度70%の再生紙を
使用しています。